

(参考資料) 職員から見た現状と課題 まとめ

手法：図書館振興室職員による地区館司書、中央館司書と会計年度職員へのインタビュー

■ 全体の考察

全館に常勤の司書が配置されて2・3年、中央館の整備から3年目となるが、合併前の各館のローカル・ルールが残っていて、共通のやり方が定まっていなかったり、図書館現場全体のことを把握している職員が司書、行政職員ともにおらず、「真庭市立図書館」としてのまとまりもまだ十分とは言えない。

今後は、今年度設置された図書館振興室が中心となり各地区館長と密接に連携を取ること、全館に共通の業務マニュアルを整備すること、現場のすべての職員が任期付、会計年度といった立場にかかわらず安心して働き、スキルアップしていける環境を作る必要がある。

■ インタビュー内容の抜粋

以下、大きく5つのテーマに分けてインタビュー内容の一部（●）を紹介する

1. 図書館について

- まだあまり市内の図書館間の連携ができていない。市内のほかの図書館の取り組みを新聞で知ることがあるのは残念

合併から15年が経っているものの、2018年勝山図書館が中央図書館として移転・再整備されるまでは、業務委託している久世図書館が中央館的な役割を担いながら全7館がゆるいまとまりで運営されてきた。このため合併前のそれぞれの地域の図書館（室）というあり方から脱しきれていないようである。

2. 職員体制・業務について

- 1年間地区館で臨時職員をしていて、その間に司書資格を取得。その後、任期付職員の試験を受けて地区館に配属された。いきなり一人職場で相談できる人もいなかった。
- 中央館は地区館に比べて職員が多いと言っても、仕事を分担しており、任期付職員と会計年度職員とで任される仕事も異なる。
- 経験が浅いので司書として仕事ができているか心配
- 中央館にもっと業務の指示や支援をしてほしい

中央図書館の開館時と今年度に任期付職員の試験があった。県立図書館で実施される新任司書研修会などに派遣されているものの、司書資格を取得したばかりで採用されて地区館を任された職員や、中央館から異動になり地区館を任された職員が不安を感じながら業務にあたっている様子がうかがわれる。

3. 蔵書・選書について

- できるだけ複本を減らして市内で回すということは理解できるし、館ごとにテーマを持って資料を収集するというのもいいが、そもそも蔵書の蓄積がなく基本図書がない。地区館では部分的なものしか持てない。蔵書構成について悩んでいる。

現在、図書館の蔵書とする資料の選書は地区館が各館で選んだ図書を中央館で取りまとめ、なるべく複本（同じ図書を2冊以上購入すること）が減るよう調整している。限られた予算の範囲内で、多様なジャンルの図書を揃えることができるというメリットがある。一方で、直木賞や芥川賞などの受賞作やベストセラーになった図書がないことや、書棚で実際に手にとって図書を選びたい（他館からの予約取り寄せまで望まない、ネットを使わない）利用者からの不満の声が聞かれる。職員が棚づくりに苦慮している様子が伺える。

4. 子どもの読書について

- 保護者に働きかけて、子どもが小さい時からの環境を整えていきたい
- 学校図書館ともっと連携していきたい。

今年度、中央図書館から学校図書館への司書の派遣が始まり全校に学校司書が配置されたことにより、市立図書館としてもこれまで以上に学校図書館との連携を深めたいと考えている。「図書館そだて会議」で音や資料の破損などを気にしている保護者の意見が目立ったことから、なにか考えたいという意見が出ていた。

5. 図書館の立地・設備などについて

- 中央館の場所がまだまだ知られていない。毎年春に全館をめぐるスタンプラリーを行なっていて、各館の場所を知ってもらう上でも効果的だったが、今年はコロナ禍で実施できなかった。
- 中央館には全国から注目されるようなCLT材やバイオマスボイラーが導入されているのに、地元の人に知られていないのではないか。どのように生かして行くか考えたい。

地区館はどこもスペースが手狭であることが課題。中央館については、まだまだ市民に利用していただけていないことが課題としてあげられている。

以上